

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

## 囲碁史からみた吉備大臣入唐説話

|       |                                                                                                                                      |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: ja<br>出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所<br>公開日: 2018-10-29<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 香川, 忠夫, Kagawa, Tadao<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/635">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/635</a>                                          |

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 圀碁史からみた吉備大臣入唐説話

香 川 忠 夫

## はじめに

平安時代後期に成立した『江談抄』<sup>1)</sup>は、当時の碩学大江匡房（1041～1111年）の談話を俊才で知られた藤原実兼（1085～1112年）が筆録したものである。

『江談抄』の内容は、公事・摂関家事・仏神事・雑事・詩事・長句事等を収録し、基本的には公卿の有職故実の伝承と考えられるが、雑事の中には後の説話文学に受容される言談が含まれる。

『江談抄』第三 雑事にある「吉備大臣入唐の間の事」は史実を踏まえた説話文学であり、その中に圀碁が登場する。

「吉備大臣入唐の間の事」は鎌倉時代初期に成立した『吉備大臣物語』<sup>2)</sup>・『長谷寺験記』上巻 第一話 「吉備大臣於大唐読野馬台帰朝事」<sup>3)</sup>・『吉備大臣入唐絵巻』<sup>4)</sup>へと継承されて行く。

本稿の目的は、これら吉備大臣入唐説話の中で圀碁がどのような意味を持つかを解明しようとするものである。

本稿は次の順序で論旨を展開する。

第一に基本的文献として『江談抄』から『吉備大臣入唐絵巻』までを検討し、説話伝承の流れを解明する。

第二に説話が成立した背景としては、陰陽道の普及とこれを説話に構成した大江匡房の存在が挙げられる。

第三は登場人物の吉備真備・阿倍仲麻呂、並びに唐人が吉備真備を試す三つの手段、即ち『文選』<sup>5)</sup>・圀碁・『野馬台詩』<sup>6)</sup>が総て陰陽に対比出来ると推定し、この中で圀碁だけが陰陽の双方を具備し、この説話の中核をなすものと主張する。

第四は圀碁と易との関連性を挙げる。この観点から圀碁の起源についての仮説を提言する。

又、この説話中の囲碁記事には明らかな錯誤のあることを指摘し、併せて囲碁史の立場からこの説話に言及した文献を例示する。

第五は鎌倉時代に絵巻にまで登場したこの説話は、近世の庶民文学の中でその内容を一部変容させて登場し、明治時代に及ぶ。説話変容の流れを例示して本稿を終える。

## I．吉備大臣入唐説話の基本的文献

### 1．江談抄

原文は漢文である。以下概要を摘録する。

吉備大臣が入唐すると唐人がその才能を妬み、吉備を高楼へ登らせた。深夜になると鬼（阿倍仲麻呂の亡霊）が訪ねて来て、「自分も日本の遣唐使であったが、唐人に囚われて高楼へ登り、餓死して鬼となった。自分の子孫の消息を知りたい。」と訴え、真備が子孫の消息を教えたところ、鬼は喜び協力を誓った。

鬼は唐人が真備に『文選』を読ませ、恥をかかせることを企んでいると告げ、神通力を発揮して真備に『文選』の講義を聞かせ、これによって唐人の企みは失敗した。

鬼は唐人が真備に名人と碁を打たせ、負ければ真備を殺すことを告げた。真備は囲碁は知らなかったが、鬼に教わり囲碁の戦法を会得した。

唐の名人と真備との対局は、終局近く市になりそうになったので、真備が名人側の黒石一個を呑み込んだ結果、真備の勝となった。唐人は怪しみ下剤を飲ませたが、真備は秘法を使ってこれを防いだので、勝が確定した。

次に唐人は『野馬台詩』を読ませようとし、真備には読めなかったが、文書の上に蜘蛛が落ち、糸を出して移動したので、それに従って読むことが出来た。

唐人は大いに怒り、真備を高楼へ登らせた。真備は鬼に百年経過した双六の筒、簞を欲しいと頼んだ。真備はこれらを使って日月を封じたので騒動となった。唐側は日月が現れれば帰国させると約束したので、真備は帰国することが出来た。

大江匡房の言として、これらの事は自分が確かな書物で読んだ訳ではないが、橘孝親（匡房の母方の祖父）の先祖から伝来した話であるので、全く謂れのないことでもないと思われる。日本で高名なのは吉備真備であって、『文選』、囲碁、『野馬台詩』が日本へ伝来したのは真備のお陰であるとしている。

## 2. 吉備大臣物語

内容は『江談抄』と大差なく、前者が後者の内容を採録したことは明らかである。

『吉備大臣物語』の最古の写本は大東急記念文庫が所有しており、同文庫では機関誌「かがみ」17で原文の写真版、名児耶 明氏の解説文及び川瀬一馬（1906～99年）の解説文を掲載している。

これによると、『吉備大臣物語』の成立を鎌倉初期と推定している<sup>7)</sup>。

## 3. 長谷寺験記

『長谷寺験記』には上巻の第一話「吉備大臣於大唐読野馬台帰朝事」として、『江談抄』、『吉備大臣物語』の内容が記載されている。

『長谷寺験記』については、永井義憲氏（1914年～ ）が長谷寺蔵本の影印本を作成し、これに解説を付している。近年長谷寺が『現代語訳 長谷寺験記』を刊行したので、容易にその内容が判るようになった<sup>8)</sup>。

ここで『江談抄』、『吉備大臣物語』、『長谷寺験記』の三者を対比すると、説話文学という枠組みでは相違はないが、囲碁の対局で吉備真備が唐の名人に勝ったとの記事は三者共通しているものの、前二者にある吉備真備が黒石を飲んだという記事は『長谷寺験記』にはない。

## 4. 吉備大臣入唐絵巻

絵巻物とは日本の古代から中世にかけての物語、説話、伝記、社寺の縁起等を詞（文章）と絵で書きあらわし、巻物にしたものを言う。通常の絵画と異なり、物事の経過を一巻の絵で時間的に表現出来ることが特徴である。

時代的には平安時代から室町時代にかけて制作され、概ね大和絵の画風で描かれた。『吉備大臣入唐絵巻』は説話型絵巻物と言える<sup>9)10)</sup>。

『吉備大臣入唐絵巻』の作者は土佐光長であり、作成を絵師光長に命じたのは、後白河上皇である。

『吉備大臣入唐絵巻』は原型が1巻であり、その内容は囲碁の条で終わっている。本来は上下2巻であったものが下巻が失われたとの見方が有力である。又、現存の絵巻には冒頭の絵詞が失われている。

現存する部分は概ね『江談抄』、『吉備大臣物語』に拠っているので、その復元は可能である。『吉備大臣入唐絵巻』に関する論考は多いが、大半が美術史からの研究である。

本稿作成のため『吉備大臣入唐絵巻』に関する近年の論考を可能な限り披見した。この中の森 克己（1903～81年）の論考「吉備大臣入唐絵巻の素材について」<sup>11)</sup>は囲碁について言及し、唐の蘇鶚の著作『杜陽雜編』にある唐の碁待詔顧師言と日本王子の対局が素材であると推定している。又、河原正彦氏（1935年～ ）の論考「吉備大臣入唐絵詞の成立と陰陽道」<sup>12)</sup>は、同絵詞成立の背景として平安時代に普及した陰陽道を挙げている。本稿の論旨は次項以降で展開するが、両氏の論考に抵触するものではない。

## Ⅱ．吉備大臣入唐説話の生成とその背景

吉備大臣入唐説話は『江談抄』によって成立し、史実を核としながらも非現実的な内容を持つ説話文学である。

この説話の中で吉備真備と阿倍仲麻呂の生涯が陽と陰に対比出来ると考える。又、唐人が真備を試し、窮地に陥れようとする三つの手段、即ち『文選』、囲碁、『野馬台詩』が陰陽の対比となっていると考え、次項Ⅲ、Ⅳでこれを論証しようとするものである。本項ではこの説話が作成された平安時代後期の陰陽道及び説話の作者大江匡房の人間像の解明を試みる。

### 1．陰陽道の普及とその影響

#### (1) 陰陽の概念

陰陽とは古代中国で成立した思想であり、森羅万象や宇宙のあらゆる事象をさまざまな観点から陰と陽の二つの範疇に分類する思想である。

陰と陽とはお互いに対立する属性を持っており、万物の生成消滅は陰と陽によって起こると考えられている。

陰陽は一般的に受動的性質、能動的性質によって分類される。具体的には闇、暗、水、女は陰であり、光、明、火、男は陽である。これらは相反しつつも一方がなければ他方も存在出来ず、この二つが調和して初めて自然の秩序が保たれると考えられている。

中国での陰陽に関する古典は『易経』である。『易経』は儒教の基本的古典として五経の筆頭に挙げられており、陰陽に基づいた占筮（うらない）の書である。

陰陽の概念については、参照すべき文献として『易経』のみならずその周辺迄に言及した2点がある<sup>13)14)</sup>。

## (2) 陰陽思想の受け入れ

古代中国に成立した陰陽思想は、戦国時代に騷衍の提唱した五行思想と融合して陰陽五行思想となった。因みに五行思想とは万物が「木火土金水」の要素から成り立つという思想である。要素の組み合わせの増加によって、より複雑な事象の説明が出来るようになった。

日本では陰陽五行思想が天文学、暦学、易学とともに5～6世紀にかけて中国から、直接か又は朝鮮半島経由でもたらされた。その際にこれらの思想、学問は、自然の瑞祥や災厄を判断し、吉凶を占う技術として容易に受け入れられた。

このような技術は漢文の読み書きの出来る渡来人の僧侶が担当したが、やがて朝廷に奉仕させる必要から俗人が行うようになり、7世紀後半から陰陽師が登場するようになった。

7世紀後半から8世紀にかけて日本が律令国家へ移行すると、陰陽の技術は中務省の下に設置された陰陽寮へと組織化された。陰陽寮は機構として陰陽道、天文道、暦道の3部門を持ち、陰陽師の国家管理を行った。

## (3) 陰陽道の政治や日常生活への影響

平安時代以降は、自然災害の続発や菅原道真などに代表される怨霊への恐れが宮廷社会の大きな問題となった。陰陽道は占術や呪術で災害を回避する方法を示し、天皇や公家の生活に関与した。

陰陽道は同時に伝来した道教の方違や物忌、更には土地の吉凶を占う風水説等を取り入れ、神道とも相互に影響を受け合い乍ら独自の発展をした。8世紀末からは密教の呪術や、新しく中国から伝来した占星術も取り入れた。

10世紀には陰陽道、暦道を極めた賀茂忠行、保憲父子が登場し、その弟子に卓越した才能を見せた安倍晴明が出た。忠行、保憲父子は晴明に天文道を、保憲の子光榮に暦道を伝え、両家が平安後期以降の陰陽道を独占した。

尚、陰陽道は明治初年の禁止令によって歴史の表舞台から消えて行った。

戦後は1980年代以降、陰陽道研究の機運が生じた。近年陰陽道に関する概説書や専門書がかなり刊行されているが、本稿の参照すべき文献としては村山修一（1914～2010年）と山下克明氏の著作がある<sup>15)16)</sup>。

## 2. 大江匡房の人間像

大江匡房については、川口久雄（1910～93年）が評伝を著わしており、ほぼその生涯を辿ることが出来る<sup>17)</sup>。

匡房は学問をもって朝廷に仕える家に生れ、幼年より神童と言われる程の才能を発揮した。後冷泉天皇から鳥羽天皇まで五代の天皇に仕え、1086年には公家に列した。以後累進して正二位に進み、1111年に歿した。

匡房は国史や宮廷の典故に通じた学者であり、儒学者でもあった。

このような経歴の匡房が『江談抄』の中で「吉備大臣入唐の間の事」を語ったことに奇異な感じを持つ。中国では儒教は国教であり、政治の指針となっていた。然し、中国には神仙思想の道教やインドから伝来した仏教もあった。これらの教典は異端の書として排除された訳ではなかった。

大江匡房は和漢に関する該博な知識を持ち、怪奇譚にも関心があり、数編の怪奇譚を作成している。

近年、深沢 徹氏（1953年～ ）は『中世神話の煉丹術～大江匡房とその時代～』を著わし、匡房の怪奇譚を紹介している<sup>18)</sup>。

### Ⅲ．吉備真備と阿倍仲麻呂並びに唐人の手段を陰陽に比定する検証

#### 1. 吉備真備

##### (1) 経歴

吉備真備については、宮田俊彦（1906～94年）の『吉備真備』が評伝として評価が高い<sup>19)</sup>。

吉備真備は695年、備中国下道郡の下級武官下道罔勝の子として生れた。出生地については、宮田俊彦は大和国としているが、地元では備中国下道郡、後の岡山県吉備郡真備町箭田（2005年1月 倉敷市と合併）を出生地としている。下道真備は15歳頃、平城京の大学寮へ入ったと考えられる。真備は6年間で所定の課程コースを終了し、試験に合格して従八位下を授けられた。

716年、真備は22歳で阿倍仲麻呂と共に留学生に選ばれ、翌717年第8回遣唐使に便乗して唐へ渡った。

真備は玄宗（685～762年）の詔により『礼記』、『漢書』の講義を受けた。留学生の学費は唐から支給されたが、真備はその全てを書籍購入に充当したので、唐の学友は驚いたと言われる。真備の唐に於ける学習は多岐にわたるが、在唐中は寸暇を惜しんで学んだと思われる。

733年、第9回遣唐使が入唐した。真備は帰国を願い出て、翌年帰国した。その際持ち帰り

朝廷へ献上した書籍は『続日本記』には『唐礼一三〇卷』、『大衍曆経一卷』、『大衍曆立成十二卷』、『樂書要録十卷』が記載されている<sup>20)</sup>。

又、『日本国見在書目録』によると、現在中国でその大半が失われている後漢の歴史書『東観漢記』も真備が将来したと記している<sup>21)</sup>。

真備は帰朝後に重用された。746年には吉備の姓を賜った。

751年遣唐副使に発令され、752年再度入唐し翌年帰国の際には唐礼に関する漢籍を将来している。

その後真備の暦学の見識が認められ、儀鳳暦に替えて大衍暦が採用された。

764年に造東大寺長官に任ぜられた。又、同年に起きた藤原仲麿の乱には、中衛大将として優れた戦略により反乱を鎮圧した。その功により参議に補任された。766年中納言となり、同年藤原真楯の死去により大納言となった。次いで従二位、右大臣となった。

769年、正二位に昇叙した。771年右大臣を辞任し、その後の消息は不詳であるが、775年、81歳の生涯を閉じた。

## (2) 評 価

吉備真備は優れた才能、真摯な努力、的確な判断力により地方豪族出身者としては破格の出世を成し遂げた。正二位右大臣と云う地位は学者、官僚でも比類ない昇進である。特に二度の入唐により中国の優れた文物を将来し、政治や文化に寄与した功績は極めて大きい。

人の生涯を陰陽で表示するならば、陽というべきであろう。その結果、史実とは異なるいくつかの伝承が付加され、吉備大臣入唐説話が形成されたものと考えられる。

## 2. 阿倍仲麻呂

### (1) 経 歴

阿倍仲麻呂の評伝については、杉本直治郎（1890～1973年）の名著『阿倍仲麻呂傳研究』（育芳社1940年）がある<sup>22)</sup>。

仲麻呂は698年に中流貴族阿倍船守の子として生れた<sup>23)</sup>。13歳で大学寮に入り、19歳で修了し、20歳で入唐したと考えられる。仲麻呂は入唐すると間もなく日本の大学にあたる太学へ入学した。この間に、仲麻呂は氏名を中国風に朝衡と改めている。次いで科挙の試験で進士科に合格して唐の官僚となった。

仲麻呂が最初に拝命した官職は東宮付校書で、官位は正九品下であった。

733年、仲麻呂は第9回遣唐使の帰国に便乗しての帰国を玄宗に願い出たが不許可となっ



た。然し、仲麻呂の唐の官僚としての経歴は、皇帝側近として以後も順調に出世街道を進んだ。仲麻呂は感性豊かで詩才に富み、盛唐の詩人李白（701～62年）や王維（699～761年）とは詩を通じての交際があった。

752年、第10回遣唐使が入唐した。大使は藤原清河、副使の一人が真備であった。

仲麻呂の帰国を玄宗は許可した。733年に仲麻呂の帰国願を不許可とした玄宗が何故今回許可したのか。733年の仲麻呂の官位は従七品上に過ぎず、遣唐大使の従四位上には及ばなかった。753年の仲麻呂の官位は従三品であり、遣唐大使の従四位下より上位であった。玄宗としては、日本人の仲麻呂の帰国を許可したのではなく、唐の官吏としての仲麻呂に日本への派遣を命じたのであろう。

同年11月、第10回遣唐使は帰国の途についた。第一船には大使藤原清河が乗り、仲麻呂が便乗した。第二～四船は帰国出来たが、第一船は現在のベトナムに漂着し、清河、仲麻呂は辛うじて長安に辿りついた。然し、その後に起こった安祿山の反乱により清河、仲麻呂に帰国の機会はなかった。

762年、玄宗とこれを継いだ肅宗（711～62年）は相次いで歿し、代宗（726～79年）が即位した。

仲麻呂は代宗の治世にも出仕したが、770年72歳で歿した。唐は従二品の官位と潞州大都督の官職を追贈してその功に報いている。

## (2) 評価（その光と影）

阿倍仲麻呂は吉備真備とともに唐の学問を学び、日本が律令国家として必要な唐の文物を将来するために官費で留学を命ぜられた。然るに、仲麻呂は自らの意思で科擧の試験を受け、唐の官僚となる道を選び、高官へと昇進した。玄宗の許可を得た帰途で遭難し、帰国を果たさず異国で生涯を終えたことは不運である。

『続日本紀』宝龜10年（779）5月26日の条に「前の留学生阿倍仲麻呂が唐で亡くなった。その家族は貧しくて葬礼さえ充分に行えなかった。天皇は勅を下して東施（あずまぎぬ）一百疋と真綿三百屯を賜った。」との記事がある<sup>24)</sup>。

仲麻呂は40年以上唐の官僚の道を歩み、正三品の高官で生涯を終えた。然るに死後家族が葬儀費用に困窮するとは驚くべき事柄である。この事は仲麻呂の官僚生活には、光の部分とは別に影というよりは闇の部分があったことを示唆している。それは仲麻呂が異国人であったことによると考える。

唐では中華思想が浸透しており、唐人から云えば仲麻呂は蕃夷の子弟に過ぎず、これを上司

とすることに対する反感があった。玄宗の愛顧を受けている仲麻呂を正面から排斥出来ないの  
で、部下が結束して仲麻呂に金銭的な損害を与えたのであろう。このような話は後の遣唐使を  
通じて語り伝えられ『続日本紀』の記事になったと推測する。『江談抄』中の「吉備大臣入唐  
の間の事」の末尾にある「外祖父橘孝親が先祖から聞いた話」とはこの事を言うのではない  
か。

仲麻呂が唐人に騙されて高樓へ登り、餓死したとの条は、仲麻呂の遺族が本人の死後困窮し  
たとの伝聞をこのような形で表現したものとする。

次に仲麻呂が鬼になったと云う意味を考えてみる。中国では鬼は死者そのものを言う<sup>25)</sup>。然  
し、日本では鬼には超人的能力があり、人を食べる怪物という意味がある<sup>26)27)</sup>。大江匡房は中  
国の鬼に日本の鬼の超能力を加味し、陰に位置付けたと考える。

### 3. 文 選

『文選』は中国の南北朝時代、梁の昭明太子蕭統（501～519年）の編纂した全30巻の詩文集  
である。春秋戦国時代から梁までの文学者131名による賦、詩、文章800余りの作品を収録した  
ものである。隋唐以前を代表する文学作品の多くを網羅している。『文選』は古くから日本に  
伝わり、奈良時代には貴族の教養として必読の文献となった。平安から室町時代にもこの傾向  
は続いた。大江匡房はこのような観点から『文選』を陽に比定したものとする。

又、匡房が『文選』を採用したのは、次の二つの理由があるとする。

第一は匡房の作成した賦が『文選』に採録された賦の影響を色濃く受けていることである<sup>28)</sup>。

第二は平安中期から『文選』が難解であるとして敬遠する傾向が出たので、文選学の復興を  
はかろうとしたとの見方である<sup>29)</sup>。

### 4. 野馬台詩

『野馬台詩』は平安時代から室町時代にかけて流行した预言詩である。

『野馬台詩』については、古来中国の南北朝時代の僧侶宝誌の作と考えられて来た。然し、  
『南史』巻26「隱逸伝」、『高僧伝』巻10「神異」には『野馬台詩』の作成に関する記述は見出  
せない。作成の時期については、『延暦寺護国縁起』に引用される「延暦九年注」が最古であ  
り、これが790年になる。

結局、作者不詳であり、『野馬台詩』そのものは平安時代初期に成立したと解するほかはな  
い。

宝誌については、牧田諦亮（1912～2011年）の研究がある<sup>30)</sup>。

現存する『野馬台詩』の文献では、写本で東大寺戒壇院蔵の『野馬台詩縁起』が最古となる。原文は漢文であり比喩が多いので、その要約を記す<sup>31)</sup>。

東海にある姫氏の国は、久しく王が統治する国であった。国政は宰相が治政の実績を挙げた。最初は法に則った政治体制が確立し、治安が安定していた。

然し、次第に上下の秩序が乱れ、下剋上の時代となって王の権威はなくなり、王朝は百代で滅びた。その後は国内に群雄が割拠して戦乱が続き、民は離散して国は滅びた。

『野馬台詩』については、いくつかの問題が論ぜられている。

936年に行われた日本書紀講筵の講義メモには、聴講者の「日本国が東海姫氏国に当たるのか」との質問に対し、講師が東海姫氏国は倭国であるとし、その論拠として天照大神と神功皇后を挙げている<sup>32)</sup>。

『野馬台詩』で次に問題となるのは百王説であり、大江匡房自身『江談抄』の中で問答式ながら百王説に言及している<sup>33)</sup>。平安末期から鎌倉初期の天台宗の僧慈円（1155～1225年）はその著書『愚管抄』第三で百王説に言及している<sup>34)</sup>。平安時代に百王説を含む『野馬台詩』が登場した要因の一つとして、仏教の末法思想が挙げられる。末法とは釈尊入滅後の仏教の展開を正像末の三時期に区分した中の一つである。正法、像法の期間をそれぞれ1000年とし、末法は永承7年（1052）から始まるとされた。平安中期以降の社会不安から末法思想は一般民衆に容易に受け入れられた<sup>35)</sup>。

以上の検討から大江匡房は『野馬台詩』を、王朝が滅び亡国へ向かうとするその内容から陰に擬したものとする。

#### Ⅳ．吉備大臣入唐説話に於ける碁

前項により吉備大臣入唐説話に於ける主役2名と唐人の2手段、『文選』、『野馬台詩』が陰陽に比定出来ることを論証した。碁と陰陽の関係については、後漢の班固の『弈旨』に「碁有黑白。陰陽分也。」とあり、同じく後漢の李尤の『碁碁銘』にも「碁局憲矩。碁法陰陽。道為經緯」の句がある<sup>36)37)</sup>。

碁が碁石の意味に使用されているのは、前漢の戴徳の『大戴礼記』中の「夫弈十碁之変。由不可既也。」の句に拠る<sup>38)</sup>。碁の用具としては、碁盤と碁石がある。又、碁盤は方の形をし

ており、碁石は圓である。前漢の劉安の『淮南子』には「天地之襲精、為陰陽」と「天道曰圓、地道曰方」の句があって、碁盤、碁石は陰陽に比定出来る<sup>39)</sup>。囲碁は陰陽と二重に繋がっている。

唐人の3手段の中で『文選』、『野馬台詩』は吉備真備の知識を試すことに主眼があり、囲碁は盤上遊戯の技倆を試す設定となっている。唐では盤上遊戯としては、象戯、樗蒲、彈碁等があったが、陰陽との比定では囲碁にならざるを得ない必然性があった。吉備大臣入唐説話を構成する要素の中で囲碁だけが陰陽と二重の関連性があり、この説話の中核をなすものとする。

本項では囲碁と易との関連性を考察し、上記論証の強化を図り、その過程で囲碁の起源についての仮説を提起する。又、吉備大臣入唐説話中の錯誤を指摘してその解明につとめ、併せて囲碁史の立場から吉備大臣入唐説話に言及した文献を紹介する。

## 1. 易の起源と構成<sup>40)</sup>

易では陰を――、陽を――と形で表示し、これを爻と称する。爻とは交、即ち交わるという意味である。陰と陽の両爻は相反すると同時によく対応して相交わる性格を持つとされる。陰陽を二段に重ねれば4種、三段に重ねれば8種の組み合わせが得られる。

この三段の陰陽の組み合わせを卦と称し、その8種の卦にそれぞれ名称を付けて八卦と言う。これが易の原型である。

八卦については、下記に図示する。

|                      |        |                    |          |          |        |        |        |    |
|----------------------|--------|--------------------|----------|----------|--------|--------|--------|----|
| 兌<br>☱               | 艮<br>☶ | 離<br>☲             | 坎<br>☵   | 巽<br>☴   | 震<br>☳ | 坤<br>☷ | 乾<br>☰ |    |
| 沢                    | 山      | (火)<br>日           | (水)<br>雨 | (風)<br>木 | 雷      | 地      | 天      | 自然 |
| 少女                   | 少男     | 中女                 | 中男       | 長女       | 長男     | 母      | 父      | 人間 |
| 説 <small>とくふ</small> | 止      | 麗 <small>り</small> | 陥        | 入        | 動      | 順      | 健      | 属性 |
| 羊                    | 狗      | 雉                  | 豕        | 鱗        | 竜      | 牛      | 馬      | 動物 |
| 口                    | 手      | 目                  | 耳        | 股        | 足      | 腹      | 首      | 身体 |
| 西                    | 東北     | 南                  | 北        | 東南       | 東      | 西南     | 西北     | 方角 |

先天図

|        |        |        |
|--------|--------|--------|
| ☱<br>兌 | ☰<br>乾 | ☴<br>巽 |
| ☲<br>離 |        | ☵<br>坎 |
| ☳<br>震 | ☷<br>坤 | ☶<br>艮 |

後天図

|        |        |        |
|--------|--------|--------|
| ☴<br>巽 | ☲<br>離 | ☷<br>坤 |
| ☳<br>震 |        | ☱<br>兌 |
| ☶<br>艮 | ☵<br>坎 | ☰<br>乾 |

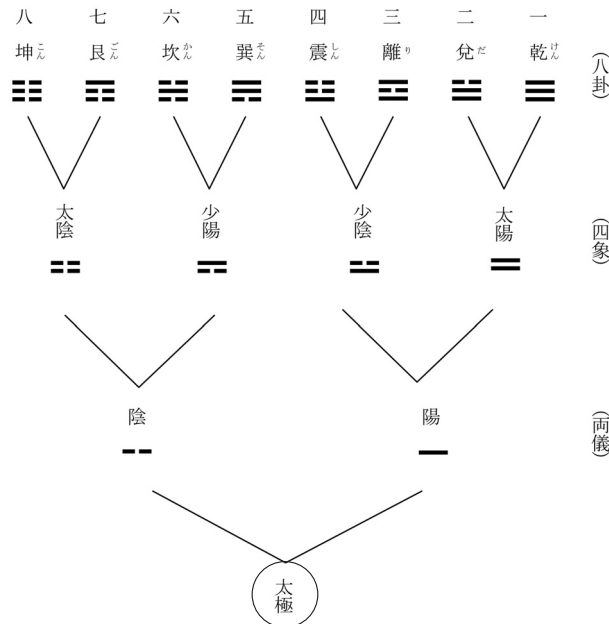
八卦の配列については、伝説として伏羲の作成した先天図と周の文王の作成した後天図がある。

易の発展段階としては、卦を更に2段に重ねるとその組み合わせは64種となる。これを卦形と称してそれぞれ名称を付け、六十四卦となってこれが現在の易の基本形態である。各卦にはそれぞれ説明文を付し経とし、上下二巻に分け、上経に三十卦を下経には三十四卦を収録している。

六十四卦については、下記に図示する。

| 坤<br>(地)   | 艮<br>(山)   | 坎<br>(水)   | 巽<br>(風)   | 震<br>(雷)   | 離<br>(火)   | 兌<br>(沢)   | 乾<br>(天)   | 上卦<br>下卦 |
|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|----------|
| 地天泰 (95)   | 山天大畜 (200) | 水天需 (55)   | 風天小畜 (82)  | 雷天大壮 (256) | 火天大有 (119) | 沢天夬 (322)  | 乾为天 (1)    | 乾 (天)    |
| 地沢臨 (153)  | 山沢損 (305)  | 水沢節 (439)  | 風沢中孚 (445) | 雷沢帰妹 (400) | 火沢睽 (284)  | 兌為沢 (427)  | 天沢履 (89)   | 兌 (沢)    |
| 地火明夷 (269) | 山火賁 (173)  | 水火既濟 (460) | 風火家人 (277) | 雷火豊 (407)  | 離為火 (226)  | 沢火革 (365)  | 天火同人 (111) | 離 (火)    |
| 地雷復 (186)  | 山雷頤 (206)  | 水雷屯 (40)   | 風雷益 (313)  | 震為雷 (380)  | 火雷噬嗑 (166) | 沢雷隨 (139)  | 天雷无妄 (184) | 震 (雷)    |
| 地風升 (345)  | 山風蠱 (146)  | 水風井 (358)  | 巽為風 (421)  | 雷風恆 (242)  | 火雷鼎 (373)  | 沢風大過 (212) | 天風姤 (330)  | 巽 (風)    |
| 地水師 (68)   | 山水蒙 (48)   | 坎為水 (218)  | 風水渙 (433)  | 雷水解 (288)  | 火水未濟 (467) | 沢水困 (361)  | 天水訟 (61)   | 坎 (水)    |
| 地山謙 (125)  | 艮為山 (386)  | 水山蹇 (292)  | 風山漸 (333)  | 雷山小過 (452) | 火山旅 (414)  | 沢山咸 (233)  | 天山遯 (249)  | 艮 (山)    |
| 坤為地 (26)   | 山地遯 (180)  | 水地比 (75)   | 風地觀 (160)  | 雷地豫 (132)  | 火地晉 (263)  | 沢地萃 (337)  | 天地否 (104)  | 坤 (地)    |

易の原型八卦を構成する根拠として、繫辞傳に「易有太極。是生兩儀。兩儀生四象。四象生八卦。」とある。



この表は筮竹で得られた卦の形から、その卦名によって『易経』中の当該箇所にも早く導くために作成された六十四卦の一覧表である。

この経について、更に註釈を付したものを伝と称する。伝は経全体について、易の成り立ちから占いの方式に至るまで多角的な説明が付されており、その内容が十篇になるのでこれを十翼と称する。『易経』は六十四卦、その経本文と十翼から構成される。

中国最古の正史『史記』によると易の原型は神話時代に溯るといふ。又、中国では20世紀末、国家プロジェクトとして総合研究の結果、最初の王朝夏の建国以降の年代を確定した。その内容は次の通りである<sup>41)</sup>。

- ① 夏の建国を BC2070年とする。
- ② 夏と殷の境界線を BC1600年とする。
- ④ 盤庚の遷都を BC1300年とする。
- ④ 殷と周の境界線を BC1046年とする。
- ⑤ 殷後期の盤庚から紂までの12王及び西周10王の在位年代を特定した。

中国の神話時代は三皇、五帝の時代とされる。これについて諸説はあるが、『史記』による

と三皇とは伏羲、女媧、神農であり、五帝とは黄帝、顓頊、帝嚳、堯、舜である。司馬遷は『史記』で「五帝本紀」から始めているが、唐の司馬貞は『史記』の註釈書『史記索隱』の中で「三皇本紀」を追記している。

この中の伏羲の項に、「近取諸身、遠取諸物、始畫八卦、以通神明之德、以類萬物之情。」とあり、八卦の創始者が伏羲であると記している<sup>42)</sup>。

又、「周本紀第四」の西伯の項に「蓋益易之八卦、為六十四卦。」とある。西伯は殷の紂王を討伐して統一国家周を創始した武王の父であり、死後諡されて文王と言われている<sup>43)</sup>。文王は八卦を重ねて六十四卦としたと記してある。

文王が作成したのは、六十四卦の卦辞、爻辞の本文である。十翼は『史記』「孔子世家第十七」に「孔子晩而喜易、序彖繫象說卦文言。」とあるところから孔子の作とされている<sup>44)</sup>。因みに易は陰陽二つの組み合わせにより森羅万象を説明するものであり、数学的には2進法と言える。17世紀から18世紀にかけてのドイツの哲学者であり数学者のライプニッツ（1646～1716年）は、2進法の創始者として知られている。

彼は中国の『易経』に関心を持ち、1703年、イエズス教会宣教師ジョアシャン・ブーヴェから六十四卦の先天図を贈られ、その中に自らが創始した2進法の計算術のあることを見出している<sup>45)</sup>。この2進法が現在のコンピューターの基本原理となっている。

## 2. 囲碁の起源と易との関連性

### (1) 起源・形態からみる囲碁と易の関連性と囲碁の起源に関する仮説の提言

囲碁の起源についてはさまざまな説が提起されているが、現在最も説得力のある論考は、小川琢治（1870～1941年）の「支那に於ける囲碁の起源と発達」である<sup>46)</sup>。

小川説の要点は次の通りである。

- ① 囲碁の原型は9路盤と考えられる。
- ② 9路盤は方64格、即ち小正方形64個から構成され、これが易の六十四卦に対応する。
- ③ 9路盤では囲碁の戦法が限定されるので、その普及は周代初期にとどまり、春秋、戦国時代までには9路盤を4面合わせた17路盤へと移行する。
- ④ 17路盤から現行の19路盤への移行は、好棋家梁の武帝の治世（502～49年）である。

戦後日本棋院では初心者に囲碁を教えるため9路盤を使用している。これは13路盤から各規格の盤を試用した経験則から9路盤になったと仄聞している。

換言すれば、9路盤は囲碁というゲームの成り立つ最小規模の規格といえる。



9路盤については、勝田倫吉氏（1930年～ ）の実証的な研究がある<sup>47)</sup>。

次に9路盤を4面併せて17路盤になったとすれば、ここでも64と云う共通項は生きている。17路盤の外周の交点は、 $(17 \times 2) + (15 \times 2) = 64$ となる。換言すればこれを想定して17路盤への拡大を実施したとも言える。

19路盤になった場合の囲碁と易との関連性については、小川は言及していない。然し、現存する中国最古の棋書で北宋末期に刊行された『忘憂清樂集』の冒頭には北宋張擬の著『碁経十三篇』「碁局篇第一」に関連記事がある<sup>48)</sup>。

17路盤から19路盤へ移行すると、盤上へ置ける石の総数は289から361となり、碁盤外側の交点の合計は64から72へと増加する。

これについて張擬は、361の中で1を碁盤の中心天元に比定し、360を古代中国の太陰暦の1年の日数に比定している。又、碁盤外側の交点の合計72については、古代中国の歳時記にある72候に比定している<sup>49)</sup>。これを次に図示する。

| 区 分  | 易        | 囲 碁  | 関 連 性                                           |
|------|----------|------|-------------------------------------------------|
| 原 型  | 8 卦      | 9 路盤 | 64卦が9路盤の64方格に一致                                 |
| 第2段階 | 64卦本文    | 17路盤 | 外周の交点64が64卦に一致                                  |
| 第3段階 | 64卦本文10翼 | 19路盤 | 石数の361は太陰暦の1年の日数に比定し、外周の交点72が『礼記』「月令」の72候に一致する。 |

ここで小川説を援用して囲碁の起源についての仮説を提言する。

易は占いの書であり、周代では筮竹を用いた。占いの結果が六十四卦のいずれに該当するかを判断するための一覧表が必要となる。現在の易の研究書では、六十四卦の一覧表は全て方64格（9路盤の小正方形）に記されている。その配列は古来守られており、配列の中にも一つの思想がある。

最初は9路盤に六十四卦を記入したものを使用していたが、教育のため判りやすいように9路盤と六十四卦を記入した64個の駒を分離したと考える。その9路盤に白黒の駒を使い、地取ゲームを考案したのが囲碁の原型であろう。

ここから囲碁の起源についての想定が可能になって来る。

前記の通り、易の八卦を六十四卦としたのは、周の武王の父文王である。その武王が殷を滅ぼしたのは、中国の国家プロジェクトによると BC1046年となっているので、六十四卦が定着して囲碁が創始されたのは、BC1000年頃と考えたい。即ち、囲碁は3000年余りの歴史があると考ええる。

中国には囲碁について堯の創始伝説があり、エンサイクロペディア ブリタニカはこれに基づ



き、1974年版で囲碁の起源を BC2356年と記述している<sup>50)</sup>。

この年代は清の乾隆年代に編纂された『御批歷代通鑑輯覽』に拠ったものであり、伏羲の即位から明代末までを干支で表現してある。同書は北宋の邵雍の『皇極經世書』に拠ったとされるが、信憑性に欠けると言われている。巷間言われている囲碁四千年の歴史とは、堯の囲碁創始伝説によるのであろう。

この伝説は西晋の張華（232～300年）の編著『博物志』が初出である。然し、『博物志』以前にはこの伝説は登場せず、後世の類書には類似した複数の伝説が見られるので、この伝説は囲碁を権威づけるための張華の創作と考える。

尚、囲碁が殷代にあったか否かを検索するため、甲骨文字 5 万字以上を収録、解説した研究書を精査したが、囲碁を意味する弈や碁を見出せなかった<sup>51)</sup>。

## (2) 音韻からみた囲碁と易の類似性

### ① 囲碁の名称の二元性

囲碁の文献上の起源は、『春秋左氏伝』の襄公25年の記事に登場する弈である<sup>52)</sup>。弈は囲碁を意味する語として『論語』『孟子』にも見られる<sup>53)54)</sup>。

一方、囲碁を意味する語としては碁がある。碁は囲碁より早く成立した盤上ゲーム六博（双六の一種）の駒を意味する語として使用されていたが、囲碁が優れた遊戯であるとの認識が深まるに従って、碁石を意味する語として使用されるようになった。囲碁には「地を囲む」という特性があり、ここから囲碁という語が成立した。文献上ではこの時期が前漢から後漢にかけてである。

AD100年に後漢の許慎が辞書『説文解字』を作成した<sup>55)</sup>。この辞書には弈に囲碁の意味はあるが、碁には六博の駒という意味だけで囲碁という語義がない。即ち、新しい文字の成立と辞書への収録には時差がある。碁はその形から碁石が木製であったと推測されるが、南北朝時代になって碁石の素材が木製から石製までに拡大されると、碁の字が出現する。碁の字は東晋の王羲之（307～65年）の『鄣茶帖』が初出である<sup>56)</sup>。梁代（502～57年）に成立した辞書『玉篇』は、その後亡逸して北宋の1013年に重修増字として『大広益会玉篇』として刊行された。これが現行の『玉篇』である<sup>57)</sup>。この『玉篇』には「碁 博碁也。」として碁が六博の駒であった痕跡を色濃く残している。碁については「碁 音其囲碁也。」となっているが、この句が亡逸した原『玉篇』にあったか否かは容易に判断出来ない。

碁に囲碁の意味が付加され六博との関連が削除されたのは、北宋の1007年に成立した『広韻』である<sup>58)</sup>。然し、唐代では碁は囲碁を意味する語として、碁待詔、琴碁書画という語が成

立している。又、碁は近代になると古字として敬遠され、同義の棋と交代して行く。

囲碁を意味する語としての弈にも問題がある。弈と字形が似て同音の字に奕がある。奕は『説文解字』によると山の雄大さを表現する語であったが、弈の代用語として使用されており、これを追認して囲碁の意味を付加したのは、明代の辞書『字彙』である<sup>59)</sup>。

囲碁を意味する語の中で弈系（弈、奕）は囲碁という概念そのものを意味するが、碁系（碁、碁、棋）は六博の駒から碁石、更には囲碁を意味する語と進化したものであり、具象的である。音韻上易と密接な関係があるのは、弈系である。

## ② 四聲百六韻とこれによる易と弈の同韻について

中国語の四聲とは、漢字を中古漢語の聲調によって四種に分類したものであり、南北朝時代の文学者、政治家で宋、齊、梁の三朝に仕えた沈約（441～513年）の『四聲譜』に始まる<sup>60)</sup>。

四聲とは平、上、去、入の四種を言う。

平聲は平らかに言って上下なく、頭音、尾音ともに高低のない聲を言う。

上聲は頭音が低く尾音が高いもの、即ち尻上りの聲を言う。

去聲は頭音が高く尾音の低いもの、即ち尻下りの聲を言う。

入聲は促音、即ち音の尻を呑む聲を言う。

この四聲に分類された漢字群は、発音の類似した漢字群に再分割され、これを韻と称する。即ち、平聲は上下両聲に分かれるが、上下併せて30韻、上聲は29韻、去聲は30韻、入聲は17韻となっており、これを四聲百六韻と言う。

又、平聲を平、上聲、去聲、入聲を合わせて仄と称し、平仄と韻を合わす押韻は漢詩作成上の基本的ルールである。

易と弈、奕はともに入聲陌韻に属するもの、両者の関連の深さを示唆する。

## 3. 吉備大臣入唐伝説中の囲碁記事の錯誤

### (1) 錯誤の内容

『江談抄』では、吉備真備が唐の名人との対局で形成不明なため黒石を1個呑んで勝つ条がある。この記事は『吉備大臣物語』、『吉備大臣入唐絵巻』にも記してある。当時は後記のように技倆が上の者、身分が上の者が黒を持ち後手番であった。従ってこの対局では吉備真備が白を持って先番であり、唐の名人は黒を持って後手番であった。

囲碁は自分の石で囲んだ面積の大小を争うゲームであるから、白番の吉備真備が黒石を呑む行為は相手側の面積拡大となって利敵行為となる。

本稿を作成するに当たって、かなりの論考を読んだが、この矛盾を指摘したものは見当たらなかった。

本項では、この問題を素材として日中両国に於ける先手、後手及び黒番、白番の関係をめぐる囲碁ルールの変遷にも言及する。

## (2) 中国ルールでの黒、白の語義と、日本での黒番、白番の逆転

中国の囲碁論で対局での黒、白を定めた文献は寡聞にして知らない。

中国の実戦譜を収録した最古の棋書『忘憂清樂集』では白先となっているが、その刊行は匡房歿後である。然し、遣唐使等により中国ルールは知られており、平安時代には白先が文書化されていた。大江匡房の『江家次第』には、「上首把黒、下貨把白。」とあり、技倆の優れた者や長老が黒を持ち、未熟な者や若輩は白を持つと記してある<sup>61)</sup>。鎌倉時代の玄尊の著わした『囲碁式』には、「黒きを敵のかなたへやりて、白を我は取るべし。」と記している<sup>62)</sup>。

囲碁で何故初心者が白を持ち、熟達者が黒を持つかという理由を記した文献は未見である。諸橋徹次の『大漢和辞典』によると、白には未だ訓練を受けていない者、白徒と同じ意味があるとしている。白徒については、春秋時代の斉の宰相管仲（BC730～645年）の著わした兵法書『管子』にある「以教卒練士擊導衆白徒、故十戦十勝、百戦百勝。」の句が初出である<sup>63)</sup>。黒には熟達という意味はないが、黒いという意味を持った字に玄があり、玄には「輝く」という意味があってここから熟達者を類推出来る。

白いと云う意味を持つ字としては、素がありここから玄人、素人の呼称が生れたと考えられる。

玄が黒と同じ意味で使用されている用例としては、古代中国の四神がある。即ち、青龍、朱雀、白虎、玄武がそれで、方位（東、南、西、北）と四季（春、夏、秋、冬）を現わしている。朱雀は雀ではなく空想上の鳥「鳳凰」であって、玄武の武は蛇と亀である。その起源は古代中国の軍隊旗にまで溯る<sup>64)</sup>。

日本では室町時代になって、囲碁の白と黒が逆転して現在のように初心者が黒、熟達者が白を持つようになった。武家の礼儀作法を定めた伊勢貞頼、小笠原貞慶の著作にその記事がある

<sup>65)66)</sup>。

その理由としては、室町時代になると碁の対局がしばしば夜になり、燈火の下では後番の年長者は黒が見えにくいという事情があった。

中国では明代になって計算方法が地計算から石数計算へ移行した。この問題を解明したのは、ハーバード大学で中国史を講じた中国人楊聯陞（1914～90年）の論文「中國圍棋數法變更

小考」である<sup>67)</sup>。

石数計算になると、盤上の石を呑みこむことが無意味になる。尚、中国では清朝末期の打碁集『寄青霞館弈選』に至るまで白先であった。

### (3) 錯誤が見逃されてきた理由

錯誤の原因としては、『江談抄』が写本として転写されてゆく過程で、「白石を呑む」が単に「石を呑む」となり、更に「黒石を呑む」と誤記されていったと考える。これが囲碁に無関心な人によって『吉備大臣物語』『吉備大臣入唐絵巻』へと訂正されずに継承された。

室町時代には白先から黒先となっているので、吉備真備が黒石を呑むことは黒の勝利となる。この事が吉備大臣入唐説話中の囲碁記事の錯誤が見逃されて来た理由であろう。

## 4. 囲碁史の立場から吉備大臣入唐説話に言及した文献

### (1) 江戸期

#### ① 『碁傳記序文』久須見九左衛門 1652年<sup>68)</sup>

『碁傳記』は現存する江戸期の棋書としては、『本因坊碁経』、『寛永版玄玄碁経』に次いで成立しており、囲碁の実戦譜を掲載した最古の棋書である。

著者の久須見九左衛門はこの棋書では対局者であり、編者である。然も、京都で出版業を営む版元でもある。久須見の経歴等は不明である。『碁傳記』の序文には作者の氏名がないので、久須見が作成したものと思われるが、その内容は『江談抄』を大幅に変えてある。

日本の宰相安倍仲麻呂が入唐して唐の皇帝武帝に貢物を奉ったが、貢物が少ないので武帝は怒り、仲麻呂を殺害した。仲麻呂が赤鬼となって荒野を漂っているところへ、吉備大臣が朝貢のため入唐したので、赤鬼は吉備真備に自らが貢物の少ないため殺されたこと、武帝が吉備真備に碁を打たせて負ければ殺す予定であることを告げる。翌日武帝は吉備真備に囲碁の対局を行わせたが、赤鬼の助けもあって対局に勝ち、命を全うした。ここには黒石を呑む条はなく、囲碁の外に『文選』、『野馬台詩』も登場しない。

久須見の序文の中で、安倍仲麻呂が安倍仲麻呂となっていることが注目される。平安時代に安倍晴明という陰陽道の名手が出て、これが安倍仲麻呂の子孫とする伝承が生れ江戸時代まで継承されたので、仲麻呂も安倍から安倍へと改姓されていた訳である。

唐の皇帝を武帝と記しているが、武宗が正しく、武宗は仏教を弾圧した皇帝として知られている。安倍仲麻呂を殺す悪役を廃仏の主役武宗に比定したと考える。

② 『囲碁雑編』 河村秀根 稿本 1783年<sup>69)</sup>

河村秀根（1723～92年）は尾張藩の国学者であり、日本の古典から囲碁に関する記事を抽出した囲碁史料集『囲碁雑編』を作成した。その冒頭に『江談抄』の記事を採録している。

③ 『爛柯堂棋話』 1 林 元美 稿本 1849年<sup>70)</sup>

江戸期の囲碁家元の当主林 元美（1778～1861年）が和漢の文献から囲碁記事を収録したもので、日本囲碁史の貴重な史料集である。吉備大臣入唐説話は江戸期には庶民の読み物として大幅に変造された形で刊行されているが、この書は変造された後記の『安倍仲麻呂入唐記』に拠っている。

④ 『囲碁事蹟部類鈔』 著者不詳 安政年間（1854～59年）<sup>71)</sup>

『江談抄』の記事を採録している。

⑤ 『囲碁事蹟考』 加納諸平 安政年間<sup>72)</sup>

紀州藩の国学者加納諸平（1806～57年）が和漢の文献から囲碁記事を抽出した史料集で、『江談抄』の記事を採録している。

⑥ 「吉備真備対唐国手玄東対局棋譜」『碁経』 林 元美 1860年<sup>73)</sup>

この棋譜は林元美晩年の稿本『碁経』の中に収録されている。『碁経』は本来無題の稿本であったが、成田山仏教図書館荒本文庫の一冊となって管理上付けられた題名であろう。

『碁経』の内容は、珍瓏と称する盤全体にわたる大型詰碁が主体であり、それぞれの作品に歴史上の人物や雅趣ある題名が付されている。林元美最晩年の意欲的な著作と云える。

吉備真備対玄東の棋譜は三葉に及ぶが、対局者名、結果等は第二葉に次の通り記してある。

和 日本吉備大臣 辰土国手玄東 唐山風白先

萬延元年 庚申 八十三翁 識

冒頭の和は、結果が碁であったという意味である。辰土という語は諸橋轍次の『大漢和辭典』にはない。然し、辰には天子に配するという語義があるので、辰土は大唐帝国という意味であろう。国手は囲碁の名人という意味である。唐山風白先とは、この対局が中国ルールによって白先という意味である。

唐の玄東が先になる訳がなく、白は吉備真備である。

萬延元年庚申は1860年であり、林元美は数え年83歳と記している。因みに元美は翌1861年6月13日に歿したので、最晩年の作品となった。

荒木直躬は「棋道」昭和35年1月号の「古今秘譜物語(1)」の中でこの棋譜について解説している。その中で当該棋譜は自らが持つ中国棋譜の中に見出せないで、林元美の創作と断定し

ている。

然し、同棋譜は清の康熙年間の名手黄龍士と周東侯との実戦譜である。この棋譜は康熙55年（1716）に清の金樸志の著わした『囲碁近譜』に収録されて以来、清代を通じて数回他の棋書に採録されている。その理由は、明代に囲碁ルールが地計算から石数計算へ移行し、**芟**が極めて起こり難くなったことに拠る。

石数計算で**芟**が成立するのは、空点が3個ある持（セキ）が1箇所（厳密には奇数箇所）あり、同時に盤上の黒白の個数が等しい場合に限られる。この確率は極めて少なく、**芟**は和局と称して尊重された。

## (2) 近代から現代まで

### ① 「通俗囲碁歴史」第1回 安藤豊次 1908年<sup>74)</sup>

安藤豊次（1866～1914年）は明治、大正期の囲碁史研究家であり、囲碁通史『坐隠談叢』の著者として知られている。安藤は囲碁雑誌「碁」第1号で吉備大臣入唐説話について、江戸期に刊行された『安倍仲麻呂入唐記』の記事を取り上げ、その信憑性に疑問を呈している。

### ② 『古事類苑』神宮司廳 1908年<sup>75)</sup>

『古事類苑』は明治政府のプロジェクトによる百科事典であり、1896～1914年にかけて全61巻が刊行された。囲碁の項の吉備大臣入唐説話では『江談抄』の記事を採録している。

### ③ 「細註日本囲碁史綱 上古篇」関 節蔵 1909年<sup>76)</sup>

関 節蔵（1877～1942年）は安藤豊次と並ぶ囲碁史研究家であり、実証的な日本囲碁史「細註日本囲碁史綱」を作成したが、未完に終わった。関は其中で『江談抄』の記事を紹介している。関は1925年、「報知囲碁講義録」を刊行しているが、その中でも『江談抄』の記事を収録している。

### ④ 『坐隠談叢』第1巻（第2版） 安藤豊次 1910年<sup>77)</sup>

安藤豊次は1904年に囲碁通史『坐隠談叢』全5巻を刊行したが、「吉備大臣入唐説話」に関する記述はない。然し、1910年に全面改稿された『坐隠談叢』全3巻中の第1巻では『安倍仲麻呂入唐記』に言及し、その内容に疑問を呈している。

### ⑤ 「吉備大臣と囲碁」日名 静一 1957年<sup>78)</sup>

日名静一（1880～1972年）は中国哲学を学び、満州医科大学講師をつとめた。戦後帰郷し、町会議員をつとめ郷土史の研究にも力を尽くした。「吉備大臣と囲碁」はガリ版刷ではあるが、『江談抄』の記事や囲碁の名称等貴重な記述がある。



⑥ 『古代囲碁の世界』 渡部義通 1977年<sup>79)</sup>

政治家で歴史学者の渡部義通（1901～82年）は晩年囲碁史に関心を持ち、『古代囲碁の世界』を著して中国や日本の古代囲碁史を記述した。吉備大臣入唐説話については、『江談抄』と『吉備大臣入唐絵詞』を紹介し、その上で『江談抄』の内容を大幅に変造した『安倍仲麻呂入唐記』にも言及している。

⑦ 『囲碁語園』 上 増田忠彦 2009年<sup>80)</sup>

上下1819頁の内容は、質量ともに囲碁史料集の白眉である。同書は『江談抄』、『吉備大臣物語』、『長谷寺験記』のほか、江戸期の『安倍晴明物語』、『南都名所集』、『本朝智恵鑑』、『安倍仲麻呂入唐記』を収録している。

(3) 海外の文献

① 『中國圍棋史話』 台湾 朱銘源 1980年<sup>81)</sup>

台湾の囲碁史研究家朱銘源氏（1926年～ ）は中国囲碁史の研究家であり、日本囲碁史にも関心が深い。同書には冒頭に『吉備大臣入唐絵巻』の囲碁対局の箇所が「吉備公與唐人對弈圖」と題しカラー版で掲載され、本文には『江談抄』の要約が掲載されている。

② 『中国囲碁史』 中国 張如安 1998年<sup>82)</sup>

同書では『安倍仲麻呂入唐記』の内容を更に改竄した。即ち、玄東が先番で天元に打ち、吉備真備がその石の上に重ねて打つ。終盤で玄東妻隆昌女が黒石一個を飲んだので真備が唐側に訴え、その結果宝鏡で隆昌女を照らして体内の黒石が確認され真備の勝ちが確定したと記している。

③ 『囲碁故事』 下冊 中国 左興 1999年<sup>83)</sup>

同書には『江談抄』の吉備真備が黒石1個を呑み、1目勝ったとの説と『安倍仲麻呂入唐記』の吉備真備の対局相手玄東妻隆昌女が、夫の負けを悟り白石1個を呑んで芻にしたとの説を併記している。

④ 『話説囲碁』 中国 馬諍 農村読物出版社 2000年<sup>84)</sup>

同書では『安倍仲麻呂入唐記』の内容を採録している。

⑤ 『囲碁与中国文化』 中国 何雲波 2001年<sup>85)</sup>

同書では②の内容を採録している。



## V. 近世以降に於ける吉備大臣入唐説話

### 1. 説話の変容

近世に木版印刷が普及し、営利事業として出版業が出てくると、書籍の形態も写本から版本へと変化した。これとともに読者層の主体が公卿、僧侶、武士等の知識階級から庶民へと変化してきて、内容も平易な表現が求められるようになった。

平安時代に成立した物語文学は、鎌倉時代になって公卿の衰微によって衰えていったが、民間の説話を取り入れ、多種多様な内容の御伽草子として室町時代に普及した。

江戸初期に成立した仮名草子は御伽草子を継承し、仮名まじり文で書かれた庶民文学である。

平安時代後期に成立した『江談抄』から『吉備大臣物語』を経て『吉備大臣入唐絵巻』に至る吉備大臣入唐説話は、その内容を興味本位に改竄した形で近世から近代にまで伝わる。以下その流れを辿ってみる。

### 2. 近世以降の刊行文献

#### (1) 『安倍晴明物語一代記』 浅井 了意 1662年<sup>86)</sup>

吉備真備が遣唐使として入唐し、玄宗は貢物が少ないのを怒り、吉備の才智を試して優れていれば許し、さもなければ殺すよう指示して、囲碁、『文選』、『野馬台詩』の順序で試す。囲碁の方は憲当という名人との対局であり、真備が2連勝して唐側は殺害を断念する。囲碁に関する説明が付加されているが、吉備が黒石を呑む条はなくなっている。『文選』、『野馬台詩』を通じて安倍仲麻呂の霊が鬼となって助ける条は『江談抄』と変わらない。尚、浅井了意(1612～91年)は浄土真宗の僧侶で仮名草子作家である。

#### (2) 『南都名所集』 巻6 太田叙親・村井道弘 1675年<sup>87)</sup>

奈良の鏡明神附属として「吉備塚」の項があり、吉備大臣入唐説話が概ね『江談抄』の内容で記述されている。

#### (3) 『本朝智恵鑑』 巻6 北條団水 1713年<sup>88)</sup>

吉備大臣という項で『江談抄』の内容が簡潔に書かれており、囲碁の項では吉備が黒石を呑む条を省いている。

北條団水(1663～1711年)は当時の仮名草子作家であった。

(4) 『安倍仲麻呂入唐記』全4巻 僧誓譽 1757年<sup>89)</sup>

同書は『江談抄』の内容を大幅に改竄し、荒唐無稽の度合いを増幅している。

即ち、安史の乱の張本人安祿山が唐側の重臣として遣唐使と折衝している。囲碁の対局では吉備の相手は唐の名人玄東、その妻で囲碁の技倆は玄東に劣らず、才気煥発の隆昌女が対局場に同席している。その上で夫玄東の形勢がやや不利とみて、妻が黒石を盗んで呑み、勝負は帛になったという筋書になっている。

同書の影響は甚だ大きかった。僧誓譽は武蔵国川崎生れ、生歿年不詳の浄土宗僧侶で、所属寺院も不詳である。

(5) 『絵本三国妖婦傳』全1巻 高井蘭山 1804年<sup>90)</sup>

同書は三国、即ち日本・唐・天竺の妖婦に関する怪奇譚を収録している。

『吉備大臣入唐説話』は「仲麿の亡霊吉備大臣を佐く、并吉備公野馬臺詩の文を読む」という条で、囲碁の対局と『野馬台詩』の読解がある。

(6) 『扶桑皇統記圖會』前編巻1 文 好華堂主人・画 柳斎度春 1849年<sup>91)</sup>

同書中の「吉備大臣入唐 仲麿霊鬼于吉備公語舊怨條」から「安祿山謀害吉備公 仲麿霊授吉備公危急救條」までが吉備大臣入唐説話に該当する。その内容は前記の『安倍仲麻呂入唐記』の内容に更に多くの奇譚を付加し、内容を広げている。江戸文化爛熟の時代に『江談抄』の内容をこのような形に変造して庶民の読み物にしたのであろう。

尚、著者の好華堂野亭（1788～1846年）は江戸後期の戯作者、浄瑠璃作者で版元付の代作者であった。画図の柳斎重春（1803～52年）も当時の知られた画人であった。同書は『吉備大臣入唐記』と改題して、明治期に活字本として二度刊行されている。

(7) 『吉備大臣支那譚』河竹黙阿弥 河原崎座で初演 1875年<sup>92)</sup>

河竹黙阿弥（1816～93年）作的一幕二場の狂言である。遣唐使の吉備真備は安倍仲麻呂が唐側に高樓に閉じ込められて餓死したとの情報を得て唐へ乗り込み、安祿山・楊国忠と交渉する。その結果、賠償金と陰陽道の天下の奇書『篋籙内傳』を入手して帰国するという筋書きである。

(8) 吉備真備の囲碁将来説

江戸期になって吉備真備が囲碁を将来したとの記事が登場した。然し、吉備真備と囲碁の関係は、正史等には全く記載がなく将来した文物にも囲碁に関するものはない。江戸期になって吉備大臣入唐説話が改竄された形で庶民の読み物として刊行されたことが発展して、吉備真備将来説が創作されたものと考えられる。以下吉備真備の囲碁将来説を記載した文献を年代順に

列記する。

『人倫訓蒙図彙』<sup>93)</sup>・『男重宝記』<sup>94)</sup>・『和漢三才図会』<sup>95)</sup>・『本朝世事談綺』<sup>96)</sup>・『古今要覧稿』<sup>97)</sup>・『爛柯堂棋話』<sup>98)</sup>

## おわりに

本稿は大江匡房の『江談抄』中の「吉備大臣入唐の間の事」を始めとし、これに続く物語を素材として、この中で囲碁がどのような意味を持っているかを考察した試論である。

本稿では吉備大臣入唐説話に登場する吉備真備と阿倍仲麻呂の生涯及び唐人が吉備真備を試す囲碁を含む三つの手段が全て陰陽に対比出来ることを論証した。特に囲碁は陰陽の双方を備えており、この説話文学の要となる。又、このことから囲碁と易との関連性を探った。

その結果、双方とも原型から発展して現形となり、64という数字の共通項を持っていること、易と囲碁の本来の名称が同一韻（入聲陌韻）に属する等、重層的類似性があることが判った。

この事は囲碁の起源を解明する手掛りとなり、囲碁の起源を BC1000年頃と推測した。この見解は1932～33年に発表された小川琢治の論考「支那に於ける囲碁の起源と発達」に基づき、これを補い、発展させたものである。

吉備大臣入唐説話は鎌倉時代に完結するが、江戸時代には庶民の読み物として怪奇譚部分を増幅して再登場し、明治初期に至る。これを追記した。この論考作成に当たり、囲碁史会会員中田敬三、南 雄司、増田忠彦の三氏のご教示を頂いた。記して感謝の意を表する。

尚、この研究は、平成27～28年度大阪商業大学アミューズメント産業研究所研究費を受けて行ったものである。

### 〔注〕

- 1) 『江談抄 第3 雑事(1) 吉備大臣入唐の間の事』大江匡房『江談抄 中外抄 富物語』後藤昭雄 山根對助 校註 新日本文学大系 岩波書店 1997年6月
- 2) 「古鈔本 吉備大臣物語に就いて」鈴鹿三七『仏教文学』20 仏教文学社 1929年10月 上記は『吉備大臣物語』の最古の写本を紹介した論考であり、原本は京大付属図書館寄託久原文庫所蔵から戦後大東急記念文庫所蔵となった。
- 3) 「長谷寺験記 上巻 第1話 吉備大臣於大唐説野馬台婦朝事」『長谷寺験記』永井義憲 新典社 1978年10

- 月 翻刻文は難解であるが、『現代語訳 長谷寺験記』（総本山長谷寺 2010年3月）がある。
- 4) 『吉備大臣入唐絵巻』小松茂美 日本絵巻物大成3 中央公論社 1977年7月
  - 5) 『文選』全7巻 小尾郊一) 花房英樹 全釈漢文大系26～32 集英社 1974年6月～76年10月
  - 6) 『野馬台詩の謎』小峯和明 岩波書店 2003年11月
  - 7) 「吉備大臣物語（翻印）名児耶 明 大東急記念文庫 建久御巡礼記付載 解説 川瀬一馬 原本（写真版付）」  
「かがみ」17 大東急記念文庫 1973年3月
  - 8) 『現代語訳 長谷寺験記』上巻 第一話 総本山長谷寺 2010年3月
  - 9) 「絵巻物」奥平英雄編 「日本の美術」2 至文堂 1966年6月
  - 10) 『絵巻物再見』奥平英雄 角川書店 1987年8月
  - 11) 「吉備大臣入唐絵巻の素材について」森 克己『日本絵巻物全集』5 角川書店 1962年8月
  - 12) 「吉備大臣入唐絵詞と陰陽道」河原正彦 「文化史研究」15 同志社大学日本文化研究会 1963年8月
  - 13) 『易の研究』上野 清 三陽閣 1933年1月 復刻 歴史図書社 1980年11月 上野 清) 1854～1924年) は  
明治、大正の教育者、数学者
  - 14) 『易の世界』加地伸行編 新人物往来社 1986年12月 中央公論社 1994年4月
  - 15) 『日本陰陽道史総説』村山修一 棲書房 1991年4月
  - 16) 『平安時代陰陽道史研究』山下克明 思文閣出版 2015年1月
  - 17) 『大江匡房』川口久雄 人物叢書 吉川弘文館 1968年5月
  - 18) 『中世神話の煉丹術～大江匡房とその時代～』深沢 徹 人文書院 1994年8月
  - 19) 『吉備真備』宮田俊彦 人物叢書 吉川弘文館 1961年12月
  - 20) 『続日本紀』上「天平7年4月26日条」宇治谷 孟訳 講談社学術文庫 1992年6月
  - 21) 『日本見在書目録』藤原佐理 古典保存会 1925年11月『日本見在書目録』解説稿 小長谷恵吉 小宮山出  
版 1956年12月
  - 22) 『阿倍仲麻呂傳研究 手摺補訂本』杉本直治郎 勉誠出版 2006年2月
  - 23) 『続日本紀』上「養老7年1月10日の条」前掲書
  - 24) 『続日本紀』下「宝龜10年3月26日条」宇治谷 猛 講談社学術文庫 講談社 1994年11月
  - 25) 「衆生必死、死必歸地、此之謂鬼。」『礼記』中「祭義第24」竹内照夫 新釈漢文大系 明治書院 1977年8  
月
  - 26) 『鬼の研究』馬場あき子 三一書房 1971年6月
  - 27) 『日本の鬼』近藤喜博 講談社学術文庫 講談社 2010年8月
  - 28) 「大江匡房小考～秋日閑居賦を中心として～」波戸岡 旭『日本文学の視点と諸相』汲古書店 1991年7月
  - 29) 「大江匡房～和漢に通曉した高位の学者～」佐藤道生 「国文学 解釈と鑑賞」730 至文堂 1992年3月
  - 30) 「寶誌和尚傳攷」牧田諦亮「東方学報」第26冊 京都大学人文科学研究所 1956年3月
  - 31) 『野馬台詩の謎』小峯和明 前掲書
- 野馬台詩の原文は、陽明文庫本に下記の通り記載している。
- 「東海姫氏国、百世代天工、右司為扶翼、衡主建元功、初興治法事、終成祭祖宗、本校周天壤、君臣定始  
終、谷填田孫生、魚膾生羽翔、葛後干戈動、中微子孫昌、白龍游失水、窘急寄胡城、黃鷄代食人、黑鼠喰  
牛腸、丹水流尽後、天命在三公、百王流畢竭、猿犬称英雄、星流鳥野外、鐘鼓喧國中、青丘與赤土、茫茫  
遂為空。」
- 野馬台詩の原文と関連記事については、次の4点の文献がある。
- 『野馬臺詩餘師』全1巻 編著者不詳 版本 版元 亀屋文蔵 1843年
- 「野馬臺詩」『本朝一人一首』巻9 林 鷺峰編 小島憲之註 新古典文学大系 岩波書店 1994年4月
- 『偽書の精神史』佐藤弘夫 講談社 講談社選書メチエ 2002年6月
- 『日本国号の由来と歴史』神野志隆光 講談社学術文庫 講談社 2016年10月
- 32) 『日本書紀 釈日本紀 日本逸史』「日本紀私記録 丁本」黒板勝美編 新訂増補国史大系 第8巻 吉川弘文  
館 2006年7月
  - 33) 「江談抄 第5 詩の事(71) 源中将師時亨の文会の篤昌の事」大江匡房 前掲書
  - 34) 『愚管抄』慈円 丸山二郎校註 岩波文庫 岩波書店 1949年11月
  - 35) 『佛教語大辞典(縮刷版)』中村 元 東京書籍 1981年5月
  - 36) 「弈旨」後漢 班固 『芸文類聚』巻74 巧芸部囲碁 唐 歐陽詢 四庫全書888 上海古籍出版社 1987年

囲碁史からみた吉備大臣入唐説話

- 37) 『囲碁銘』後漢 李尤「全後漢文」巻50『全上古三代秦漢三国六朝文』2 清 嚴可均 台湾 世界書院 1969年8月
- 38) 『大戴礼記』巻11「小辨第74」前漢 戴德 栗原圭介 新釈漢文大系 明治書院 1991年7月
- 39) 『淮南子』上「天文訓」前漢 劉安 楠山春樹 新釈漢文大系 明治書院 1979年8月
- 40) 『易』本田 濟 中国古典選 第1巻 朝日新聞社 1966年2月『易経』上「易学解題」今井宇三郎 新釈漢文大系 明治書院 1987年7月
- 41) 『夏王朝は幻ではなかった』中国 岳南著 朱建榮・加藤優子訳 柏書房 2005年5月
- 42) 『史記』1(本紀)「三皇本紀」吉田賢抗 新釈漢文大系 明治書院 1973年2月
- 43) 『史記』1(本紀)「周本紀第4」前掲書
- 44) 『史記』7(世家下)「孔子世家第17」吉田賢抗 新釈漢文大系 明治書院 1982年2月
- 45) 「0と1の数字だけを使用する2進法算術の解説、並びにこの算術の効用と中国古代から伝わる伏羲の図の解説に対するこの算術の貢献について」(1703年4月)「第四章 中国の創始者伏羲が彼の著作で使った記号と2進法について」「中国自然神学論～中国哲学についてド・レモン氏に宛てた書簡～」(1768年)ドイツ ライプニッツ 山下外男 訳『中国学』『ライプニッツ著作集』10 工作舎 1991年12月
- 46) 『支那に於ける囲碁の起源と発達』上下 小川琢治「支那学」第6巻第3号、第7巻 第1号 弘文堂書房 1932年7月、33年5月
- 47) 「囲碁の謎」10「囲碁の形象2」勝田倫吉「週刊碁」日本棋院 平成4年3月24日
- 48) 『碁経13篇』「碁局篇第1」宇野精一訳註『忘憂清樂集 解説』講談社1983年3月
- 49) 『礼記』上「月令第6」竹内照夫 新釈漢文大系 明治書院 1971年4月『呂氏春秋』上「12紀」楠山春樹 新編漢文選 明治書院 1996年7月
- 50) Encyclopedia Britannica 15th 1974「originated in China as Wei - Chi as 2356 BC according to some sources」Wei-Chi は囲碁を意味する。BC2356年を堯の即位の年としている。
- 51) 『甲骨文字字釈総覧』松丸道雄、高島謙一編 東京大学出版会 1995年1月
- 52) 『春秋左氏伝』3 鎌田 正 新釈漢文大系32 明治書院 1977年12月
- 53) 『論語』下「陽貨17」吉川幸次郎 中国古典選 朝日新聞社 1966年1月
- 54) 『孟子』「離婁篇第4下告子篇第6上」金谷 治 中国古典選 朝日新聞社 1966年6月
- 55) 『説文解字注』3篇上 文3 重1 竒、6篇上 木部 碁 後漢 許慎編 清 段玉裁注 上海古籍出版社 1981年10月
- 56) 『鄣茶帖』東晋 王羲之 二王帖巻二中 二王帖目錄評釈上 鄣茶帖 明 呉江、董漢策刊 国立国会図書館蔵 『王羲之の大字典』飯島太千雄 東京書籍 1980年 『増補改訂版王羲之の全書翰』森野繁夫 白帝社 1996年
- 57) 『玉篇』巻12木部 碁 梁 顧野王 北宋 陳彭年等 台湾中華書局 1968年
- 58) 『校正宋本広韻』巻1上平声 碁 北宋 陳彭年等 台湾芸文印書館 2002年
- 59) 『字彙』丑集 大部 明 梅膺祚 鹿角山房蔵版 1579年
- 60) 『中国文学概論』塩谷 温 講談社学術文庫 講談社 1983年7月
- 61) 『江家次第』巻5 列見 大江匡房『古事類苑』遊戯部 神宮司廳 1908年8月
- 62) 『碁式』玄尊『群書類従』第19輯 続群書類従刊行会 1933年12月
- 63) 『管子』上「7法第6」遠藤哲夫 新釈漢文大系 明治書院 1989年10月
- 64) 『礼記』上「曲礼上第1」竹内照夫 前掲書
- 65) 『條々聞書貞丈抄』第1 伊勢貞頼 1528年成立『続々群書類従』第7 国書刊行会 1907年7月
- 66) 『大諸礼集』2 小笠原貞慶 1592年成立 島田勇雄、樋口元巳校註 平凡社 1993年3月
- 67) 『中國圍棋數法變更小考』中国 楊 聯陞 韓国斗溪李丙燾博士華甲記念事業委員会編 韓国 一潮閣 1956年10月
- 68) 『碁傳記序文』久須見九左衛門 版本 1652年
- 69) 『碁碁雜編』河村秀根 稿本 1783年成立 原本 名古屋市立鶴舞中央図書館蔵 解説翻刻本 国立国会図書館 大阪商業大学アミューズメント産業研究所
- 70) 『爛柯堂棋話』1 林 元美 1849年成立 林 裕校註 東洋文庫 平凡社 1978年6月
- 71) 『碁碁事蹟部類鈔』著者不詳 井上頼圀増補 稿本 安政年間(1854～59年)原本 無窮会専門図書館神習

- 文庫蔵 解説翻刻本 国立国会図書館 大阪商業大学 アミューズメント産業研究所
- 72) 『囲碁事蹟考』 加納諸平 稿本 安政年間成立 高井周耕 翻刻出版 1943年 8月
  - 73) 「吉備真備対唐国手玄東対局棋譜」『碁経』林 元美 稿本 1860年 成田山仏教図書館 荒本文庫
  - 74) 「通俗囲碁歴史」第1回「碁」第1号 安藤豊次 関西囲碁会 1908年 1月
  - 75) 『古事類苑』「遊戯部2 囲碁」神宮司廳 吉川弘文館 1908年 8月
  - 76) 「細註日本囲碁史綱 上古篇」「囲碁世界」第1号 関 節蔵 囲碁同志会 1909年 7月  
「報知囲碁講義録」1号 関 節蔵 報知新聞社 1925年 3月
  - 77) 『坐隠談叢』第1巻(第2版) 安藤豊次 関西囲碁会 1910年 3月
  - 78) 「吉備大臣と囲碁」日名 静一 稿本 真備町(岡山県吉備郡) 公民館 1957年 9月
  - 79) 『古代囲碁の世界』渡部義通 三一書房 1977年11月
  - 80) 『囲碁 語園』上 増田忠彦 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 2009年 3月
  - 81) 『中國圍棋史話』台湾 朱銘源 台湾 中央中報社 1980年 6月
  - 82) 『中国囲棋史』中国 張如安 團結出版社 1998年 8月
  - 83) 『囲棋故事』下冊 中国 左興 中国統計出版社 1999年 7月
  - 84) 『話説囲棋』中国 馬諍 農村読物出版社 2000年 1月
  - 85) 『囲棋与中国文化』中国 何雲波 人民出版社 2001年11月
  - 86) 『安倍晴明物語一代記』全6巻7冊 浅井了意 版本 京都 西村又左衛門 1662年 国立国会図書館蔵  
活字本『安部晴明物語一代記』『仮名草子集』第1巻 東京堂 1980年 5月
  - 87) 『南都名所集』全10巻 太田叙親、村井道弘 版本 1675年 国立国会図書館蔵 活字本『近世文芸叢書』  
2 国書刊行会 1912年
  - 88) 『本朝智恵鑑』全5巻 北條団水 版本 京都出雲寺刊 1713年 国立国会図書館蔵 活字本『本朝智恵  
鑑』巻第1『北條団水集草子編』第3編 野馬光辰、吉田幸一編 古典文庫 1960年11月
  - 89) 『安倍仲麻呂入唐記』全4巻 僧 誓譽 版本 錢屋利兵衛 1757年 国立国会図書館
  - 90) 『絵本三国妖婦傳』全1巻 高井蘭山 版本 1804年 国立国会図書館 活字本 大泉堂梓(荒川藤兵衛)  
1886年 7月
  - 91) 『扶桑皇統記圖會』前編1～3 好華堂主人 柳斎度春 版本1849年 活字本『吉備大臣入唐記』閻花堂蔵  
版 1875年 3月 東京銀花堂蔵版 1886年 2月
  - 92) 『吉備大臣支那譚』河竹黙阿彌 出版者 吉村いと 1889年 6月『黙阿彌全集』第10巻 河竹繁俊編 春陽  
堂 1925年
  - 93) 『人倫訓蒙図彙』巻2 版本 書林平楽寺開板1690年 活字本 朝倉治彦校註 平凡社 東洋文庫 1990年
  - 94) 『男重宝記』巻3 版元 吉野屋藤兵衛 版本1693年 活字本「女重宝記、男重宝記～元禄若者心得集 長  
友千代治校註」現代教養文庫 社会思想社 1993年
  - 95) 『和漢三才図会』巻17 寺島良安 版本 1713年 活字本 東京書籍 1970年
  - 96) 『本朝世事談綺』巻3 菊岡沽涼 版本1734年 活字本 近古文芸温古叢書3 博文館 1891年
  - 97) 『古今要覧稿』巻260 屋代弘賢編 版本 1842年 活字本 国書刊行会 1905年
  - 98) 『爛柯堂棋話』巻1 林 元美 前掲書